

志井のクリニック

正会員 末 廣 香 織 君

正会員 末 廣 宣 子 君

正会員 梶 田 洋 子 君

小倉駅からのモノレールの終点駅に近く、まだ田園風景の中に開発された住宅地の点にする環境にこのクリニックは建設されている。日本の地方拠点都市の典型的な風景が広がっている。その中で小さなコンクリートの家の群の上にフラットな屋根が架けられたように見えるこのクリニックの姿は、新しい建築のありようを示しているが、違和感や主張のありすぎる建築がどうしても持たざるを得ない風景の中での存在としての不快感はまったく感じられない。それはこのクリニックを形づくる家の形を思わせる単位空間の抑制と機能的なスケールのよさによって成立している。

このような単位の群としてクリニックを構成しているのは、一人の医師がすべての診療にかかわる作業をするための計画学的な探求の結果であるという設計者の説明はきわめて説得力のあるものとしてここでは建築化されている。その意味で、このような郊外での開業医院のプロトタイプとしてもこの平面計画は説得力をもっていると考えることができる。

小さな単位は大きさがそれぞれ異なっているが、それらに検査室や診察室、レントゲン室がそれぞれに割り当てられている。

このクリニックは医療機能の単位の集落の関係がそのまま平面構成をつくりあげている。

それぞれの医療単位群の間隙はこのクリニックの中に周辺の田園風景をさまざまな風景の断片として取り入れることを可能としており、これによって環境の中で医師は働き、患者は診察を受けるといういままでの医療機関にはない空間体験が出現している。さらにこのような医療単位の群として平面を計画することによりさらなる増築を可能としている。このこともこのような開発をされつつある郊外の医療施設を1人の医師が開業するクリニックとしては、優れた展開性を可能としていると考えることができる。

さらにこれらのコンクリートの家の群に架けられた水平の屋根は、夏期の日射に対して、その下におかれた医療施設群の温熱環境を守る環境的な装置としてすぐれた解決と考えることができるが、そのみならず、これらのコンクリートの家そのものが冬期には暖房装置の温風から得られた熱の蓄熱装置として働いているようで、夜間を通じて昼間に蓄熱された熱が放出され、朝にも暖房のたちあげが容易であるということである。

また、地域のコミュニケーションのために小さな家の形をした空間が用意されており、さまざまな予測不能の事態に対応する空間的余白としての可能性をもっている。現地審査に訪れた時には新型のインフルエンザに対応すべく、患者の入院、治療空間として使用されていたが、コンサートや地域の医療の講習などにも役立つであろうと予測でき、従来の診療施設にはない、このような郊外の医療施設にはこれから考慮すべき先見性のある計画としてのありようを示している。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。